

大阪国語教育アセンブリー2014

第三分科会〈小説との対話〉 「思考の入り口から対話へ」

ご発表者 大阪府立箕面高等学校 鈴木寿先生

記録 大阪府立勝山高等学校 山本翔輝

第二分科会では、小説を学ぶ意義や授業での共通目標についてと、教材研究から実践までの様々な方法についてご教授いただいた。

鈴木先生は冒頭で、「小説の授業は必要か」という問いを私たちに投げかけた。小説の授業は「役に立つのか」、「入試に出るのか」などの生徒からの疑問に対し、私たち教員が答えを用意し、授業の中でその確信を持てることや実践できることが私たちには不可欠であり、そのために、生徒の力を引き出し、伸ばすための「生徒像」を意識しつつ教科指導を行っていく必要があると提示された。

また、授業で小説を読むうえで、鈴木先生は多様な高校における共通目標として、「共通知」（世代の縦と横をつなぎ、すべての人が議論できる教養、知識）の定着と「読む方法」の習得を挙げられた。これらをもとに小説を読み進めていく。実際に授業で小説を扱う際には、長い小説こそ冒頭部を一字一句ていねいに読むことで思考の入り口を探し出す。鈴木先生は、小説を読む手がかりとしての十項目を提示してくださった。鈴木先生はこの十項目をもとに対義語、対照的・対比的な言葉の発問からより深い理解へ導く発問へとつなげていく。具体的な授業例として、「檸檬」の冒頭部の授業例や「こころ」の二学期当初から中間考査までの実践例を示していただいた。定期テストでは「ことばの定義」について問題を出し、生徒に「ことば」について思考させ、小説を読むための「思考の入り口」が「ことば」にあることを意識させていた。

実際の授業ではさまざまな「対話」を行うことで授業を展開していく。特に教員とテキストとの対話では、私たち教員が教材研究を行っていく際の「読み」と「発問」のための「指標」90を示していただいた。この「指標」によって教材研究を進めていくことで、扱う教材ごとに特徴を捉え、授業の切り口を明確にし、発問することができる。このことで、私たちが自信を持って教壇に立つことができるのではないか。

今回、鈴木先生の発表を聞かせていただき、これまで教材研究を進めていくうえで感じていた「どこから授業展開を考えていけばよいか」という不安を取り除く手段をいくつも授けていただいた。今後の授業展開を考えるうえで、指標や「思考の入り口」を用いて教材研究を重ね、授業での武器としていきたい。

最後になりましたが、小山先生をはじめとする「アセンブリー」運営に関わってくださった先生方、貴重な機会を作っていただき本当にありがとうございました。